

くじら日記

太地町立博物館から



本連載で度々エピソードに触れてきた雌のコビレゴンドウ「ジータ」が、命を落としました。ひと月以上に及ぶ治療や看護の末の出来事でした。病理解剖のために海から引き揚げたジータの身体は、動かないためか、とても重く感じられました。

ジータがくじらの博物館にやってきたのは平成29年です。8年間で体長は300センチから370センチに、体重は380キログラムから700キログラムに成長し、飼育する鯨類で2番目に大きいクジラとなりました。

少し擬人化した言い方になりますが、「ジータは感情がわかりやすく、素直な性格。仲間思いだけでなく、人に対しても明るく、心が通っていると思うことも多かった」と、担当する飼育員が口にしていました。繁殖への参加もあって大勢が見守っていたことから、特別な思い入れをもつ飼育員も多かったことでしょう。

飼育員の思い⑥

「生き物であれば、失われるときが必ず訪れる」。それがわかっていても、飼育員は動物のその時に直面すると、例外なく無力感と悔しさで、やりきれない気持ちになるのです。ジータを看取った飼育員も、言葉にはならない感情が込み上げたに違いありません。ただ病理解剖が始まると、飼育員の顔つきが少し変わります。

ある飼育員は、獣医師とくまなく臓器や組織を観察し、汲々となりながらも死因の究明に努めます。別の飼育員は、研究や教育に生かすための調査と試料採取に臨みました。そして、初めて解剖を経験する飼育員は、鯨類の形態に驚かされつつ、解剖技術を身につけようと慣れない手つきでジータに触れていました。それぞれがジータから学び、今生きているクジラの飼育につなげようと、黙々と手を動かす姿がそこにはありました。



鯨類にそれぞれの「思い」をもつ、くじらの博物館の飼育員

びくしていたのでは、とても身が持たないし、先に進むこともできない。そこは割り切った、『何が起きるか分からない明日だけれど、少しはいいことがあるかもしれない。明日は明日の風が吹く、出たところ勝負でやっつけよう！』、そんな具合に楽天的に構えながら、それでも前に進んでいくことが大切なのだと思う」という、飼育員の肩の力を緩めてくれるような言葉です。

動物の命と向き合い、目まぐるしい毎日過ごすくじらの博物館の飼育員。それぞれが、「飼育員の思い」で記した4人と同じように、鯨類への大切な感情や考えを心に抱えて、動物の前に立っています。立ち止まりそうになったときはその「思い」に立ち返り、「飼育員」の大先輩の言葉通り、前を向いてほしいと願っています。

(太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹)

「ジータ」から学び 前を向いて